# 欧州囲碁普及の先達の記録

異文化を受け入れるというのは、いつの時代も難しいことであると思う。欧州における囲碁然りで、インターネットを通じて情報が氾濫し、最新の定石を級のプレーヤーが知っているような現代ですら、一度「中」に入ってしまえばさることながら、極東からきて未だ欧州において文化として根付いていないゲームを始める、というはじめのステップには多大な勇気が必要なのではないかと思う。となれば、初めて欧州に囲碁をもたらした人々の努力は推して知るべしである。

囲碁を知った初めての欧州人は、中国にわたったイエズス会士であったろうと思われる。最近、友人から「ドイツの数学者・哲学者であるゴットフリート・ライプニッツ（1646-1716）が、囲碁に言及したラテン語の文章を残している」と聞いて驚いた。その英訳を見たところ、「囲碁」という名前には触れていないものの、「イエズス会士のニコラ・トリゴー（1577-1628）が、中国宣教の祖であるマテオ・リッチ（1552-1610）が残した文書を元に執筆した本に基づく」と断った上で、たしかに囲碁と断定して間違いないゲームを紹介している。これについては残念ながらここでは紹介する時間がないので、またの機会に譲ることにするが、ライプニッツの文章が引き金となって欧州に囲碁のコミュニティが生まれた、ということはなかったようだ。また、仏ヴェルサイユ宮殿の旧マリー・アントワネットのコレクションの中には、碁盤の上に童が碁笥を抱えて寝そべっているというなかなか面白いデザインの日本製の漆塗り小箱がある（https://www.photo.rmn.fr/CS.aspx?VP3=SearchResult&VBID=2CO5PC6V29EA4&SMLS=1&RW=1536&RH=759）し、近世に中国から欧州に輸入された磁器で琴棋書画図を表したものも少なからず存在すると見られるが、当時の人々にとっては描かれているモチーフが何かのゲームを表現している、という認識すらなかったかもしれない。

囲碁が欧州に根付き始めたのは19世紀終わりから20世紀初めのことである。明治政府のお抱え外国人として日本にやってきたドイツ出身のオスカー・コルシェルト（1853-1940）が村瀬秀甫から囲碁を学び、1880年代初頭には『日本・中国のゲームである「碁」、チェスのライバル』という文章をドイツの雑誌で紹介。その後それをまとめて本を出版した。しかし、それで囲碁がすぐに広まったか、というと、なかなかそうもいかなかったようであり、普及が本格的に始まったのは20世紀、それも1910年代を待たなければいけないようだ。以下に、1900年代前半に普及に努めた先達の証言のうち、日本であまり紹介されたことがないであろう、と思われるものを3つほど紹介し、その苦労を推し量ってみたいと思う。

## プーラ、1914年-海軍を襲った「伝染病」

以下は、英国囲碁連盟の機関紙「British Go Journal」にかつて掲載された記事（<https://www.britgo.org/bgj/05519.html>）を意訳したものである。

「以下の記事は、ユーゴスラビアの故アービン・フィンク氏の手になる文章で、1974年にザグレブで行われた欧州囲碁コングレスの際に配布されたものである。（…）

『囲碁が欧州に知られ始めたのは、20世紀の始めのことだといって誤りはないだろう。欧州で400年の歴史をもつチェスに比べて、4000年の歴史を誇る囲碁が欧州に現れたのがこれほど遅かった、というのは驚くべきことだ。しかも、チェスと囲碁は、どちらも二人が対戦する盤上遊戯である、運に頼らない「知能ゲーム」である、共にアジアで生まれた、など多くの共通点があるのにも関わらずである。欧州で囲碁が近年まで嗜まれてこなかった、というのには恐らく多くの理由があるに違いない。高名なチェスのチャンピオンであるエマニュエル・ラスカーが自らの著作で触れていたように、チェスの駒の動的な性格が、囲碁の静的な性格よりも（勿論、囲碁は実際にはチェスと同じくらい、もしくはよりダイナミックなゲームなのだけれども）欧州のメンタリティーに合致した、ということが一つの理由としてあるのかもしれない。いずれにしても、欧州が極東の芸術や習慣と共に「ゲームの中のゲーム」である囲碁の存在を知ったのは、日本がペリーの黒船来航に直面し、鎖国を解いて西欧との外交を受け入れると共に、その科学技術を採り入れた19世紀末になってからのことであった。

欧州に囲碁を持ち込み、広げようとする試みは様々あったに違いないが、その殆どは忘れられてしまった。囲碁史に刻まれるべきこうした努力や行動を再発見するのは重要なことであると思う。私自身も、今から50年以上前にそのような試みに加わったことがあるので、以下に証言を残しておこうと思う。

それは1914年、第一次世界大戦開戦前夜のことだった。私は海軍士官学校の学生で、軽巡洋艦「アドミラル・シュパウン」に勤務していた。同艦はこの頃、オーストリア・ハンガリー帝国の主要な港であったプーラ（注：現在はクロアチア）に停泊していた。私は夜になると、海軍のクラブでチェスを指したものである。チェスクラブでのゲームにはいつも人だかりができていて、ああでもないこうでもないと試合をつつくのであった。私が、アルトゥール・ヨナク・フォン・フライエンヴァルト少佐に出会ったのもこの場所であった。少佐はザルツブルクの出身で、蒸気航走艦「カイゼリン・エリーザベト」に勤務していた1914年に中国の青島で囲碁に出会い、その虜となったのだった。少佐は私のチェスの腕を褒めてくれた上で、「日本のゲームでGoというのがあり、チェスよりもよほど面白いから、私の艦に見に来なさい」と招いてくれた。私は当然その招待を受け入れて囲碁の手ほどきを受けた。何度かレッスンを受けて、結構なスピードで上達することができたと思う。

ヨナク少佐は、強靭な意志とエネルギーを持って、自分が推すゲームの新たなプレーヤー作りに励み、私のような若い海軍軍人を中心に人を集めて、おかげで短期間で熱心な碁打ちがかなりの数できあがったのである。新たなプレーヤーは更に多くのプレーヤーを勧誘する、といった具合で、囲碁の流行はまさに伝染病の感を呈した。艦上、コーヒーハウス、海軍クラブなどあちこちで囲碁を打つ人が見られ、まもなく、プーラの本屋では、折りたたみ碁盤とガラスの碁石を組み合わせた囲碁セットが販売された。普及活動はほとんどヨナク少佐のおかげであり、その献身と疲れを知らぬ行動力のおかげで、少佐は「碁神ヨナク」と呼ばれたものである。私達の囲碁クラブには200人以上のプレーヤーがおり、まず間違いなく1918年以前では欧州で最強・最大のクラブであったと思う。しかしヨナク少佐は1918年、不幸にも戦争で命を落とし、我らの囲碁クラブはリーダーを失った。そして、プーラに輝いた「囲碁の炎」は消え去り、燃え盛った炎は風に吹かれ、火花として舞い散った。

しかし、いくつかの火花は生き残こって、その火を伝え、新たな生命を吹き込むことを目指したのであった。私もその一人だった。ユーゴスラビアでは多くのハイレベルなチェスプレーヤーがいて、私は、この国に知能ゲームが発展するのに必要な才能と関心があり、囲碁が広まる下地がある、と睨んで、その普及をすることに決めた。新聞記事、小冊子、ラジオやテレビ番組、チェスクラブとの接触、簡易囲碁セットの製作など、色々な手段を試みたものである。そうこうしているうちに、まったく偶然にリュブリャナ（注：現スロベニア首都）大学に囲碁を打つ学生グループがいることを知った。彼らは、私が1960年にある週刊誌に投稿した記事をみてルールを知ったのだった。彼らはとても熱心で、チェスプレーヤーを中心に沢山の人を勧誘し、私の手元にあったわずかな囲碁の本を貪り読んで学んだものだった。こうして、私たちは1961年、ユーゴスラビア初となる囲碁クラブをリュブリャナに設立した。その後も普及活動は続き、ユーゴスラビア各地に多くの囲碁クラブが作られた。また同時に技術の向上にも励み、何人かは欧州で最高レベルのプレーヤーとなった。こうしてプーラの港を起源として、ユーゴスラビアに囲碁が根付いたのである。」

なお、ヨナス少佐については、「部下に囲碁を強制し、チェスを禁止した」という逸話もまことしやかに語られている。ヨナス少佐およびフィンク氏の普及努力はまさに「伝道」というべきか、その純粋なひたむきさは微笑ましくも心を打たれるものがある。当時、海軍軍人はアジアに向かう機会も少なからずあり、17世紀のイエズス会士ではないけれど、囲碁に出会うチャンスの最も多い職業だったのかもしれない。

## パリ、1928年-「日本流」と「中国流」

フランスに囲碁がやってきたのは1960年代の終わりであると言われる。高名な数学者クロード・シュヴァレ（1909-1984）が日本で囲碁に出会って大いに気に入り、対戦相手を見つけるために生徒たちに囲碁を教えたのが始まりで、その生徒たちが中心となって最初の囲碁クラブを立ち上げ、そこに韓国出身のイム・ユジョン氏（1925-2016、「メットル・リム」の名で知られる）が加わって礎を築いた。これに間違いはないのだが、「囲碁が実は1920年代の終わり頃にすでにある雑誌で紹介されていた」ということが、囲碁史を研究されているオランダのファン・エース氏のおかげで最近になって発見された。問題の記事は、アンリ・ガストン・ランスラン（1867-1953）なる人物の手になるもので、『ラナチュール』という大衆科学誌に1928-1929年にかけて6回にわたり掲載された。ランスランは、上述のヨナス少佐同様やはり海軍出身の人物で、海運業などにも携わったようである。記事は「ランスラン司令官」という名前で投稿されており、ランスランが引退してからの著作である。ランスランはこの当時囲碁に興味を持った人と同様、好奇心旺盛なインテリであったのか、海洋に関するテーマを中心として様々な分野にわたる記事を著しているという。ランスランは『ラナチュール』の記事の中で、囲碁のルールを紹介するだけでなく、その出会いについても語っており、なかなか興味深い内容となっている。

第一回目の記事は以下のように始まる。

「日本人がいまだ日本式に生活していた時代、家の中に置かれた家具のうち、最も重いのが碁盤であった。欧州人の中にも、囲碁のことを知っている人がいるであろう。横浜や神戸で商売を営んだことのある人であれば、日本人の部下が、上司がちょっとでも出かけるやいなや、升目がひかれたボール紙をいそいそと持ち出して、謎めいたルールに従って白石、黒石でその盤を埋めるゲームに一心不乱に勤しんでいることを知っている。途中で上司が帰ってくると、彼らは急いでそれらを片付け、着物の袖に隠すのであるが、各人50-60手も打ったかと見えるゲームが中断されて、一旦すべてがしまわれても、打ち手は後で中断時点での盤上の状況を再び完全に再現することができて、欧州人はその記憶力に驚ろかされたものである。中には、このゲームに興味をもって、「ゲームの最終目的はなにか？」「盤上で何をしようとしているのか？」「誰が勝者なのか？」といった必然的に湧いてくる問いを投げかけた人もいる。しかし残念ながら、日本人の多くが囲碁を打てるのにもかかわらず、簡潔な言葉でゲームを説明できる人はあまりに少ない。実際には、その原則は簡単なものなのであるが。黄色人種と白人との間の論理的思考の違いをしめすのに、これ以上の好例はないかもしれない。」

ランスランは日本で囲碁に出会ったようであるが、その時期は定かではない。記事内では、W.A.デ・ハヴィランド（1872-1968、英出身。早稲田大学法学部で教鞭を執り、日本で囲碁に出会う。欧米人として初めてアマチュア高段者の域に到達した、と言われる。二人の娘は有名なハリウッド女優となった）が1910年に出版した『The ABC of Go：the national war-game of Japan』や、井上十吉（1862-1929、英語学者）が1911年に出版した『Home life in Tokyo』などが引用されていることから、それが「1910-1928年」の間である、ということしか分からない、という。

さてランスランは日本で、囲碁の専門家から指導を受けたが、その指導法はもっぱら定石などをひたすら記憶する、といった内容であったようで、それに対して相当な違和感と反発を感じたことが、以下のような文章から見受けられる。

「日本では、囲碁専門家の結社とも言うべき団体があり、これらのプロは有料のレッスンで生計を立てている。プロたちは公式の大会に出場することでその名声を維持しており、その結果がよければ、生徒数の増加、レッスン料の引き上げにつながるので、こうした大会は非常に重要なものとなっている。そして、このプロこそが囲碁を半ば神秘的な存在として一般から遠ざけている張本人であり、おかげで欧州人はその秘密をよりよく知りたい、という勇気を失うのである。囲碁のプロは「囲碁は難しいゲームで、強くなるためには、素晴らしい先生について、長年の研鑽を積むことを必要とする」ということを一般に認めさせている。またレッスンをするや、囲碁の大事な原則をひた隠しにして、特別な手を教えることだけにこだわるのである。こうした教育法は延々と続くのがその利点である。一般的に、「囲碁を20年間学んでも、さらに学ぶことが残っている」と言われる。実際、碁盤は広いので、ほぼ無限の可能性があるのは確かである。生徒たちは、漢字の学習を通じて素晴らしい記憶力を持っており、十数手も続く変化を覚えることができる。（…）彼らにとっての理想は、理由を分からぬまま、記憶に従って一手一手を打つことができる、ということなのだ。」

「日本の本における囲碁のルール説明は複雑で読むのもうんざりするようなものである。こうした説明は、囲碁を始めてしばらくたってからでないとその意味も有効性もわからないものであり、これをそのまま転用したのでは、フランスの読者にとっては拒否反応を招くだけとなることを恐れるので、まったく逆の「分析的」な手法を用いることにする。」

しかし、ランスランの囲碁人生にある日、劇的な変化が訪れる。

「『ラナチュール』の日本人の読者の方には、日本での指導法とまったく逆の手法を使って我らの同朋である欧州人に囲碁を教えたことを謝罪しなければならない。すべては、「中国革命」のせいなのだ。私は日本で囲碁のレッスンを受け、6ヶ月の教育に相当する生徒のレベルに達することができたのだが、そんなある日、リー氏に出会ったのである。（…）リー氏は、ロンドンの中国公使館に務める、タキシードに身を包んだ若い中国人である。同氏は、私が碁盤を手に持っているのを見て、一局打ちましょうと提案した。そして、にこにことしながら、私が打った石をすべて例外なく殺してしまったのである。続いてリー氏は囲碁の戦略について話をしてくれ、わずか1時間ほどの間に、日本の先生以上に私にその意味を理解させてくれたのであった。そこで私は、リー氏との会話の成果を『ラナチュール』の読者に紹介するものである。リー氏は間違いなく革命人であった。彼の囲碁の説明もちょっと革命的に思われるではないか。（…）リー氏によると、囲碁の戦術は、4つの原則にまとめられる。

相手を囲う。

自分の石を逃げ出す。

相手を切る。

自分の石をつなげる。

恐ろしく簡単であるが、その応用は易しくなく、こうした原則を理解していても、何も自分から理解しようとせずにただ先生が教えたとおりに石を並べるそこらの日本の銀行員に完敗することは可能である。我々は囲碁をプロとしてではなく、アマチュアとして学ぶのであり、試合に勝つ、というよりも心の満足を得ることが目的である。そのためには、中国流が日本流にはるかに勝っていると思われる。」

何とも痛快なまでの批判である。ランスランの文章は、現代でも起こりうる日仏間の文化的な衝撃を端的に表現している面があって、フランスに住んでいる者としては大変面白い。「読書百篇、意自ら通ず」という日本の伝統的な教育法が、子供の頃から批判精神を養うことが重要な欧州への囲碁の移植にあたっては一つの壁となった、そして今で問題となり続けているのは私自身も経験済みの話である。日本も大きく変わったけれども、ランスランの「日本流」に対する批判は未だにある程度の真理を保っているような気がする。

## ベルリン、1937-39年-ある日本人の奮闘録

ある時、日本に一時帰国した際に、神田の囲碁専門古本屋で『独逸の思い出』（壮光舎印刷、1979年）という本が目に入った。著者は福田正義八段（1899-1981）。本因坊秀哉門下で、藤沢秀行の師匠としても知られる。福田は1937年末から1939年6月にかけてドイツを訪問し囲碁指導を行った経験があり、その時の日記などを本としてまとめたものである。なぜ、囲碁のプロがその時代にドイツに行くことになったのか。また異国の地でどのような経験をしたのか。様々な疑問がわき、心惹かれて買い求めた。絶版になっていることもあり、以下にその内容を紹介したい。

福田がドイツに行くことになったのは、以下のような経緯からであった。

「昭和十二年の半ば頃であった。当時の日本棋院の理事の一人、林幾太郎氏より一年間の予定でドイツに行くようにとのお話を受けた。（…）あとで聞いたことであるが、大倉副総裁（注：大倉喜七郎）の御一家は、前年ベルリンで催されたオリンピック大会にお出になったが、その時ドイツ人同好者から棋士派遣について切望された。それに対し副総裁も承諾されたらしい。その後、当時東京市長だった永田秀次郎氏から重ねて進言があり、ついに実現されることになったようである。（p9）」

1936年8月に開催されたベルリンオリンピックは、ヒトラーがプロパガンダを目的に開催したことで知られる。同年11月には、日独防共協定が結ばれるなど、両国は、まだ本格的にではないにせよ、接近が図られた時代であり、こうした文脈の中で福田の派遣が決まったのだった。福田は当時38歳であったが、妻を亡くしたばかりで意気消沈しており、恐らくはそこから抜け出す意味もあってドイツ行きを受け入れる。福田はすでに青島など中国を訪れた経験があったが、ドイツはまた別次元の異国である。旅立ちにあたってその不安を正直に吐露している。

「ドイツ行きが決まったとなると、何かと落ちつかなくなった。当時は、棋士はまだみな和服である。私なども青島に旅行したときは洋服を着たが、それ以外は和服で通している。西洋のことは何も知らぬといってよいであろう。ドイツ語を少しは覚えたいと思って、胡桃正樹（囲碁ライター、元日本棋院職員）さんに教えてもらうことにした。海外旅行を夢見ながら、語学の方はサッパリである。あの温厚な胡桃さんに何回も叱られたりした。（p9）」

日本棋院は盛大な送別会を開催し、多くの人が東京駅に見送りに来たという。こうして福田は1937年10月半ば、東京を出発した。郷里の豊橋に立ち寄った後、神戸から客船に乗り、香港、シンガポール、ペナン、コロンボ、アデン、スエズ、カイロを経て、一ヶ月をかけてマルセイユに向かう船旅。そこからさらに汽車で北上し、パリを経由してベルリンに向かった。

「巴里からベルリンまでは夜行の寝台車に乗った。誰か日本人が乗らないかと思い、汽車が発車するまでホームに立ちつくした。この時ほど日本人が恋しく、心細い思いをしたことはなかった。今でも思い出す。（p19）」

ベルリンでは、戦前のドイツ囲碁界の中心人物であったフェリックス・デューバル（1880-1970。1930年には永田秀次郎などの招きで日本で一年を過ごした。鳩山一郎と1936年に日独両国の新聞の後援を得て電報碁を打ち、これは両国で話題を呼んだ、という。御子息も独囲碁界で中心的な役割を果たした）夫妻を初め、大倉組の支店長など大勢の出迎えを受けた。順風満帆のスタートと思われたが、まもなく問題が発生する。

「実は、私はベルリンではどんな計画をたてて待っていてくれるだろうと大いに期待していた。ところが、ドイツ側は別に新しい計画はたてておらず、私が来てから考えるという心構えであることがわかった。ここに私の思惑違いがあった。

計画をたてることも、私が主となってやらねばならぬことがわかった。計画をたてるとなると、その方法を工夫し、自然そのためには普及費が必要となってくる。しかし、これは実際には容易なことではないことに気がついた。私はベルリン滞在費として、一ヶ月四百円支給されることになっている。（…）なお、稽古料はいっさい受け取らぬ方針であった。これは、日本棋院からの話でもあり、私もその方が万事やりよいと思っていた。生活だけのためならば、（…）物価もわりあい安価で、ぜいたくをせぬかぎり楽である。しかし、普及費もここから捻出するということになると、これは実際問題として容易なことではない。さりとて、来て早々普及費を申請することは私にはできない。（…）その後、後援者、同好者とも相談のうえ大体つぎのことを予定した。

1. 新聞社の後援を得て、碁の歴史、碁の遊び方を連載すること。
2. 日独協会で、宣伝のための講習会を催してもらうこと。
3. 適当な時期に、ドイツ選手権大会を催すこと。
4. つづいて合宿講習会を催すこと。
5. 各地方の講習会に出席すること。

これらの予定を実行すべく努力することとした。（p22-23）」

今ですら囲碁クラブの活動組織は困難を伴うのに、連絡手段などが発達していなかった当時は、福田本人に加え、福田を支える日本人、ドイツ人の周囲の人々にもどれだけの苦労があったであろうか。文化的な違い、日常的な困難も、現代に比べてはるかに大きかったであろう。また、計画された活動は現在でこそ常識的なものばかりだが、福田にとってはまったく未体験のものばかりであったはずである。

「私は碁の普及発展と共に、「碁は簡単な勝負事であるというような、おそまつな第一印象を与えないようにすることもまた大事なことである」と思った。研究すればするほど味があり、深味があり、思考力を養うこともできる。さらに進んでは、人生の機微に触れることにもなる。こういう雰囲気を感得させることが、先発者の最も心掛けるべきことだと思った。さりとて、あまりむずかしいことをいって、そのために面倒なもの、近寄りにくいものという印象を与えてしまっては大衆はついてこない。その辺の調整がむずかしい。（p21）」

福田は、普及にあたっての心構えをこう述べている。大変篤実な人物であったようである。しかし、それが逆に災いし、ストレスが溜まったのか、福田は着いて数ヶ月して、体調不良に陥る。

「（ウンター・デン・リンデンにある）カフェー・ビクトリアで週三回催される会は、夜七時頃から始まり、夜半十二時頃から一時半頃に終わるのが常である。夜おそくなることは、何かと慣れないし、気も使うので、不眠症気味になり健康にもこたえた。（p23）」

「午前八時に起きる。少し頭が痛い。夜寝るのが遅いので、どうしても朝寝坊になりがちであるが、田中氏の好意で、一時間ずつドイツ語を教えてくださることになったので、この時間に起きたのである。この頃、神経衰弱気味で、頭がぼんやりしているためもあるだろうが、なんと覚えの悪いことだろう。自分ながらオンチだと思う。（p170）」

「私は一つの言葉を覚えるのも容易ではない。ごく勘の悪い初心者が一つの定石を覚えるのに何回もかかると同じようなものであろう。（…）私の一番の大きな欠点は人前でしゃべれないことだ。だいたいおしゃべりの方でないが、ドイツ語となると一層口に出てこない。（p212）」

「私は三月頃から足が重くなり、脚気ではないかと思うようになった。気候風土にも慣れず、言葉も不自由なので人一倍気を使うことも多く、神経衰弱気味で、健康には自信を持っていた私もすっかりバテ気味になってしまった。（p35）」

そんな福田を、後援者の一人が諭した。

「「少し功をあせり過ぎている。長く滞在するためには、のんびり暮らしてまず土地に馴れることだ。健康で帰国できたらまず及第。少しでも仕事をして帰れば八十点以上である。海外に出ている者は、ほとんど多かれ少なかれ神経衰弱になっている。長続きさせるためには、何よりも健康に注意し、適当に要領よく暮らすことだ」。（…）下宿のグリーゼマンおばさんも心配して、昼寝をするようにとしきりにすすめてくれる。（…）健康のためとあれば、昼寝は怠け者のすることではないと思うらしい。（p35）」

こうして福田は真面目一辺倒を改め、気分転換にも気を配るようになり、前向きな態度を取り戻す。

「ドイツ選手権大会の終わった翌日からつづいて合宿講習会が行われた。会場はチューリンゲンのエルゲルスブルグの森の中にある古城で行われた。滞在期間は四月十四日より二十日までであった。参加者は三十名余。日本人は私と松本、滝田両氏の三人であった。時間は食事の時間、講義の時間、休憩の時間と、それぞれ決っていて、それが時間にしばられるという感じは少しも起こらず、ごく自然に、しかも規則正しく行われる。こうしたことの訓練は気持ちのよいことであった。

私の講義は、定石、互先の布石、置碁の布石、中盤戦の要領、侵分の計算などであった。このほか時間の都合で対局もした。みな熱心でそれだけ張り合いもあった。

休みの時間がくると、みなで森の中を散歩した。みな相当な年輩であっても、こうした時は嬉々として遊ぶから楽しい。森の中は禁煙になっていて、紙屑やあき罐などは見つけ次第お互いに屑入れに入れる。ドイツの森は特に清潔と聞いていたが、まったくその通りで、羨ましい気がした。

会員達は、外出の時誰かが例の折畳みの盤とプラスチックの石を持参している。適当な場所を見つけると、遊ぶことはそっちのけで対局をはじめる。日本で温泉に行っておきながら湯にも入らず対局に夢中になっている碁敵を連想させられる。

夜食後はダンスがはじまる。（…）碁を教えてもらうからダンスを教えると無理にも引張り出されたりした。

楽しい講習会だったが、ただ水の少ないことと、食事のおそまつには閉口した。（…）ベルリンに帰ってから、何はともあれ出掛けたところは、日本人食堂であった。（p28）」

今でも、欧州の囲碁キャンプに参加して、地元人のペースに合わせることは容易な技ではない。福田の「講習会」の描写は、そういった意味でもポジティブな心に溢れていて、ようやく生活のコツとでも言うべきものをつかんだことを思わせる。こうして、1年の予定であった滞在は、最終的に外務省の許可を得て、半年間延長されることになる。その間、ドイツの地方を指導で周ったほか、北欧や中欧、スイス、フランス、イタリアなどに旅行にもでかけ、観光だけでなく、美術館訪問やオペラ鑑賞など欧州文化を堪能した。

福田は、「大家が未開地に知識を授ける」という状況であり、ドイツ側には日本と比較して不十分な点が多かったにもかかわらず、相手を自分の色に完全に染めてしまおうとするのではなく、客観的な視点を保って、相手の良さを少しでも見出そう、と努力したようである。福田は、「白人の碁風-白人に学ぶべきこと」と題して以下のようなことを記している。

「ドイツ人といわず、白人の碁は一般的に長考型である。ともかく得心のゆくまで考えて、それからおもむろに手を下すという調子である。何を考えているのかと思うところでも一応考える。だから手拍子というような失敗は少ない。最後まで勝負を捨てず、じっくり打ってくる。自然粘り強いということになる。（…）長考型というのも、一つは対局歴も浅く、研究する期間も少なく、自然日本人のように、勘というものが養われておらないためでもあろう。（…）どちらかといえば、日本人は気合で打ち、白人は理性的であるともいえようか。（…）白人にも学ぶべきところはある。待ったや助言をせぬことである。（…）碁石をおもちゃにするようなこともない。長考派で熱心な彼らにはそんなヒマもないのかもしれぬ。（p30-31）」

さて、福田がドイツを訪問した時期は、ナチスが全盛を極めた時代であった。その日記にも、チェコ問題など政治的な動向、ヒトラーの演説の様子や、また日中戦争の深刻化などについて記した個所が多く見られる。

「今日はドイツ碁会に出席の日であったが、臨時の休みになった。ドイツがオーストリアを一兵も失わず合併したというので、ベルリン市内は喜びにあふれているようである。これについて夜八時からヒトラーの演説があるから、その間はどんな仕事も商売も休んでその演説を聞けというのである。工場はむろん休みである。自然、碁の会も休みということになったようである。（…）ヒトラーの人気ますますあがる一方である。ヒトラーの得意思うべし。しかし、すべてのものを休んで演説を聞けとは強制的統一と思われもする。強制的には無理が生ずる。ナチスの力をあらゆる機会に誇示しているかにも見える。

このようなことがいつまでつづくであろう。（…）

私はこの臨時休会のため、ご馳走になることもできたし、何かと好都合であった。しかし、何か反発を感ぜずにはおられなかった。（p26）」

ドイツ選手権大会に並行して行われた日独親善碁会の表彰式では、

「いつの間にか、日の丸の国旗とドイツの国旗が飾られ、S.S（注：親衛隊）の黒服を着ている人々や（…）ブラヘッタ氏（注：福田の滞在中にドイツ側の世話役を務め、囲碁普及に大きな功があった）のようにS.A（注：突撃隊）の服の人々もいた。これは、ナチス党員として正式に出席にしたことにもなり、会を一層引き立てた。（p67）」

という状況であり、このほかの日独親善囲碁会でも、KDF（歓喜力行団）やヒトラーユーゲントなどが出席することがあったという。福田の活動は、このようにナチスの勢力の恩恵を受けた部分もあれば、その悪影響を受けた面もあった。中でも、ユダヤ人への迫害が激しくなると、数多かったユダヤ人の碁打ちが次第に碁会を離れざるをえなくなる状況が生じた。福田は後援者に相談し、日本人会での碁会を開いてそこにユダヤ人の碁打ちを招く。

「この計画にはユダヤ人同好者も大変喜んだ。（…）会の日にはよく集まり、毎回にぎやかに催された。しかし残念なことに長くはつづかなかった。ユダヤ人圧迫が次第に露骨になってきたので遠慮して、そのうちに出席しなくなってしまった。（p27）」

福田が平和主義者、反戦主義者であった、というわけでは決してなく、広東陥落の新聞記事を見て「愉快な意外であった。むやみに嬉しくなる（p51）」と素直に述べたりしているが、これは恐らく当時の日本国民の平均的な感情であったろうし、それを責めても仕方がない。ユダヤ人迫害についても、ドイツ在住の日本人から色々な話－ユダヤ人への同情論から、ユダヤ系金融機関による陰謀があるため、迫害には理由がある、とする説まで様々であったという－を聞いた結果として、「どれが真相かそれは誰にも分からぬと思う」と述べるに留まっている。しかしそれは別にしても、囲碁打ちとしての連帯感からユダヤ人の愛好家に打つ場所を提供しようと努めた、という行動こそが重要ではないだろうか。

1939年5月、福田に対し、日本棋院から「ベルリン滞在を5月で打ち切り、アメリカに渡り普及に努力せよ」との手紙が届く。

「普及はよいが、滞在中どういうふうに会を催し、どのように収入を得ればよいのだ。碁の専門家ということに対し、アメリカの同好者はどれだけの理解を持っているだろう。ドイツの場合と違って生活費を得なければならない。金もなく案内もなく、未知の国に乗り込んで行くことは相当な心構えが要る。日本棋院は私に対し何の援助もせず、しかも普及して来いという。はなはだ不満を覚えずにはいられぬ。（p218）」

福田は珍しく不満を露わにするが、「しかし、自分は日本棋院を出発する時普及の先発者としてどんな事でも辛抱し、棋士としての対局を汚すことなく努力すると覚悟はしていた」と思い直し、これに従った。こうして福田は同年7月、1年間半の滞在を終え、ドイツを離れた。ベルリンからロンドンを経由し、そこから船で米国に向かう計画で、ニューヨークに着いたのが8月25日。その3日前には、日本の平沼内閣が「欧州の天地は複雑怪奇なる新情勢を生じた」と述べて総辞職するきっかけとなった独ソ不可侵条約が締結されており、続けて9月2日には、ドイツがポーランドを侵略。そして翌3日には英仏がドイツに対して宣戦布告し、第二次世界大戦が開戦したのであった。福田によると、「先生は実によい時期にベルリンを出発した」と羨ましがられた、という、極めてよいタイミングであった。アメリカには1940年初頭まで滞在、各地を訪問したが、父親の病が重くなったことを聞いて、予定を早めて帰国。実に2年半ぶりに日本の土を踏んだ。

日本に戻った福田であるが、その世界行脚はここで終わらなかった。1943年には、戦局が激化する中で、満州に派遣され、満州棋院の師範代を務めると共に、慰問などを行い、終戦を迎えたのも、満州の新京（現在の長春）においてであった。福田は戦後まもない1950年と1954年にも米国を訪問。1950年の訪問では、アインシュタインに面会し、日本棋院から託された盤石を贈呈している。また、1965年には、欧州を再訪問するなど、戦後も積極的な海外普及に務めた。以上に紹介した『独逸の思い出』は、1979年、福田の棋士生活引退にあたってまとめられたものであった。

## 終わりに-戦争を生き残った碁盤

手前味噌で申し訳ないが、昨年、日経新聞の取材を受ける機会があり、私自身のフランスでの普及活動について述べた。その直後、地方にお住まいの読者の方から日経新聞に連絡があり、私に「我が家に明治時代から伝わる囲碁用具をお譲りしたい」という。その方から頂いたお手紙によると、その盤石は、御祖父様が「明治20-30年代に掛けて接客に用いるために買い整えた調度品の一つで、先の太平洋戦争による米機の空襲の被害を免れ、土蔵の中で眠っていたもので、約一世紀以上家族に囲碁を嗜む者もなく、徒に死蔵していた」ものであった。その方がお住いの街は空襲でほぼ完全に焼け落ち、盤石が収められていた土蔵はその一帯でほぼ唯一焼け残ったものであったという。何ともありがたい以上の話であり、「頂きます」と即答した。

碁盤はカヤ盤で、厚さは約12センチ、重さは約13キロ。水分を含んでいるのであろうか、心持ちずしりと響く重さである。碁笥・碁石は二種類ある。一つには明治時代に実際に使われていたであろう石が収められている。白石はハマグリであろうと思われるが、黒石の材質は残念ながらわからない。すべて丸みをおび、形が揃っている今日の石と違って、形状はとても薄く、使い込まれたためなのか、そもそも形を統一しようという意識がなかったのが、それぞれが歪で一つとして同じ形のものがないが、それが逆に斬新で不思議な味を醸し出している。数も、薄いことから、通常の180子を大きく超え、200を超えるものがそれぞれの碁笥に入っている。もう一つの碁笥・碁石は、装飾用であると思われ、石は恐らく白石が日向蛤、黒石が那智黒製で、数も180ピッタリ揃っている。碁笥には蒔絵が施されており、蓋の表面には、それぞれ平安朝の公卿の風俗を示した絵が、また箱部分には貝合せらしき図柄が描かれている。これも、恐らくは明治時代に製作された品と思われる。こじつけになるが、はじめて欧米の言語で囲碁の教則本を著したオスカー・コルシェルトがドイツに帰国したのは明治17年だそうであるから、明治20-30年代のものであるというこの盤石は、ちょうど欧州に囲碁がやってきたばかりの時代の品である、と言えようか。

何度かに分けてこれらを私の住むフランス・グルノーブルに輸送し、今年の6月にようやくすべてを持ってくることができた。貴重な品であり、我がアパートに単に飾っておくことも考えたが、盤石はやはり本来の役割を果たしてこそ真価を発揮するのではないか、と思い、積極的に使うことに決めた。私は自宅を金曜日にクラブに開放して囲碁会を開いているのだが、フランスを初め欧州によくいらしている関西棋院の林耕三先生が、欧州囲碁コングレスの後にグルノーブルに来てくださったので、その機会を利用して「碁盤開き」を行なうことにした。クラブに呼びかけたところ、老若男女、レベルは初心者から8段、国籍はフランス、中国、韓国、日本という20人が集まり、予想以上に盛大な会となった。林先生の人徳もさることながら、歴史ある盤石の不思議な力を感じたことである。

さて、先に述べた福田の著作に、以下のような文章がある。

「（戦争が終わり）いよいよ満州から帰国ということになって、なによりも心にかかったのは、碁盤の始末をどするかということです。満州棋院には、カヤの立派な碁盤が五十面以上もあった。夏のうちから冬の燃料を用意する土地のことではあり、まして街へ出れば碁笥を線香立てとして売っているという状態ですから、放っておけばたきぎにされてしまうのがせきの山です。まったく線香立てになっている碁笥を見たときは情なく、涙が出たものです。結局日本人会の会長をしておられた満鉄副総裁の平島さんに碁盤の処置はお願いしてきましたが、はたしてどうなっているか知るすべもありません。（p281）」

戦争に消えた盤石は、数知れぬであろう。グルノーブルにやってきた盤石も、すんでのところで灰燼に帰すところを生き延びたものである。これからも、この盤石には、囲碁というゲームを通じて皆を集め、幸せになる役割を果たしてもらおう、と考えている。